

乙部由子著

『中年女性のライフサイクルと パートタイム——スーパーで 働く女たち』

評者：本田 一成

パートタイマーが働く職場では、パートタイマーが増えたり、活躍するという方向はゆるがず、ますますその存在感が高まっている。職場のパート基幹化は、パート労働法制や社会保険制度、パート処遇整備や能力開発、パート労働組合加入や労働条件向上活動などに関して、政労使の重い腰を上げさせつつある。こうした中で当事者であるパートタイマーの心情はいかなるものか、パート意識が改めて問われている。

本書は、パート雇用の先進業態であるチェーンストア（以下、本書にならいスーパーと記す）で働くパートタイマーの意識を検討する。質問紙調査に基づいてパート意識の深層を分析する心理学的な手法でなく、女性という視点を強め、家庭と職場に関心を寄せるジェンダーリサーチを選択し、ストアで168人ものパートタイマーに対するインタビューを重ねた結果を分析する。

本書の構成と概要について記すと、序章は女性労働研究に関する文献調査の結果を提示する。社会全体の動向の視点、組織や文化の視点、個人の視点、産業の視点、スーパーの視点から既存研究を渉猟し、女性労働への知見を要約する。序章に続く各章は以下の通りである。

第1章「スーパーの歴史」は日本のスーパー

について1945年～1969年の誕生期、1970年～1984年の転換期、1985年～2006年の低迷期に分けて、歴史を整理する。小規模な個人商店から大型化したスーパーへという業界の変化の中身と小売業に関する法律を検討する。

第2章「女性労働の趨勢」は戦後からの日本の女性労働を概観し、女性労働に関わる法律の変遷と内容について述べる。とりわけ非農林業の既婚・未婚別の雇用者数、パート比率、家事従事者比率、完全失業者比率の推移から、農業自営から雇用者への移行、専業主婦の動向、パート化の傾向、女性労働の社会経済的環境を検討する。

第3章「パートタイマーの歴史」は高度成長期からオイルショック、サービス経済化の進展を経て増加したわが国のパートタイマーの歴史をかえりみる。各種パート調査を利用してパートの変遷を追うとともに、パートタイム労働法の施行とその問題点を示す。

第4章「スーパーの発展とパートタイマーの役割の変遷」は、スーパーにおけるパート労働の位置づけの変化をスーパーの発展の歴史に重ねてかえりみる。不在なら経営が成り立たない基幹労働者としての役割をパートタイマーが担うに至る経緯を、ストア内の各部門におけるパートの仕事内容と処遇制度の分析を通じて明らかにする。

第5章「スーパーで働く女性パートタイマーへの調査報告」は著者が実施したインタビューの結果を報告する。ジェンダーリサーチの説明のあと、調査単位であるスーパーの属性、調査期間、インタビュー対象者について述べる。報告は一般職パート、夜間パート、マネジメントパートに分けて行う。対象者のうち13人分のパート事例が挿入されている。

第6章「調査結果の考察」は、未婚者と子供のいない既婚者のサンプルを除いて、さらにイ

ンタビュー結果に立ち入って分析する。スーパー職場のパートの特徴と、家庭での役割とパート労働の関係を検討したうえで、50代のパート、夜間パート、マネジメントパートの順にパート属性を特定して議論を進める。

終章の「パートタイマーの今後の課題」は、これまでの章の内容を踏まえて、女性という視点からパートタイマーの今後の課題について述べる。法律の効果、職場と家庭の関係、職場の基幹化の3つの観点から課題を記してパート労働の将来を展望する。

主として本書の中心部分であるインタビュー調査の結果分析に焦点を合わせよう。これまで、パート意識研究の主流は職場での満足感とその原因追求であり、多くの有益な知見を見出してきた。だが、定量的分析手法を駆使して詳しく意識を掘り下げていくほどに、当然のことながら1人のパートタイマーの姿がみえにくくなる。では、個別のパートタイマーの心情を知るすべはないのかといえ、例えば、様々なメディアの取材を受けたパート本人が語った情報や、パート本人が事実上自費出版に近い形で示す心情の吐露などがある。本書はどちらにも属さないという意味で、何かしら違和感のある穴を埋めるようにパート意識を問う研究として貴重である。また、本書は必ずしも明示していないが、例えば、配偶者以外の家事責任分担者の存在がパート労働供給に与える決定的に重要な影響とか、企業への愛着といったコミットメントの中身など、別の定量的分析の結果を本書が定性的に追試したと解釈される点がある。要するに、これまでの知見に沿う形で現実感のあるパート意識が素直に理解できることこそ本書の大きな意義であると思われる。

以下では、著者のようにフェミニズムやジェンダーリサーチに深い理解がなく、また女性同士の仲間意識を形成して調査ができない立場か

ら、ただし、企業からの情報の偏りを避けるために、企業からの紹介者ではないパート個人からパート仲間の連鎖的なコネに頼る雪だるま式サンプリングではほんの10人ほどの主婦パートの話のうちがった経験からコメントを5点記す。

第1に、本書で繰り返し指摘される「家族的責任を考えない人」とはなかなか納得しにくい。本書が述べる家族的責任の実態はそれほど明らかではない。家族形態は明らかにされており、家族形態が家族的責任の認識の有無の重要な規定要因と主張されている。家族形態が同じでも、家族的責任にかかる時間や内容に広がりがあるからこそ、それらを把握するための共通する指標を手がかりにした結果が知りたい。また、家族的責任に対する意識は、考えているかいないかではなく、多かれ少なかれ考えているがその負担感が様々な変数によって軽減されたりされなかったりするのではないか。また、日常の繰り返される責任が将来も含めたそれかも問われる。例えば、責任を考えていないといいつながら、給料の使途が子供の学費というのでは十分に責任を考えていると思われる。

第2に、本書では職場や家庭に関して大きな不満をもつパートタイマーは描かれていない。不満を声高に表明せず、将来の夢や扶養からの自立などを通じて前向きに生きるという優等生の働き者たちという印象を受ける。例えば、著者はパートタイマーがスーパーで勤めることにメリットがあると考えているという大切な点に言及する。だが、そうはいってもメリットがデメリットをほんの少し薄める程度なのか、十分に埋めあわせるほどのものか。しかも、指摘されるメリットの多くは、家族的責任を便利にこなすためのものであることをどう解釈するのか。また、パート基幹化に見合う処遇や昇進などといっても、パート本人が堪忍しているだけ

で本当はとてもやりきれないという解釈もできる。パートタイマーの心情からみれば、まさにそうかと思いきや、いともすんなり処遇を評価しているようにみえる。こうした点をジェンダーサーチに基づいて詳しく書くべきではないか。

第3に、本書のいう「わたしの人生」は、著者の主張ほど固定的なものではないかもしれない。子育てを中心として家族的責任にほとんどを注ぎ、子供の独立以降から、「わたしの人生」が始まるという。子育てから離れるのは、ライフヒストリーの1つの区切りであることは間違いないが、子育てに限らず、大小さまざまな区切りの中で何らかの折り合いをつけながら生きてきた内容は問わないのだろうか。日常的な「わたし」はいったいどんな折り合いをつけてきたのだろう。どんな心情で家庭と職場にいるのだろう。不満の折り合いのつけ方は、後払いのような自由だけか。むしろ人生は後になるほど面白くないと考える「わたし」もいるはずであるし、同じ「わたし」でも時の経過とともに別の家族的責任が発生するリスクも大きい。本書ではパートタイマーの40代と50代の境目が強調されている。年齢による差異と固定的に考えるのも1つの方法だが、人生に対する考え方の差異を意識して、現在までの人生と将来を観察することが有効と考えられる。

第4に、既に記したように、本書の分析対象のうち多くは不満の少ないパートタイマーであることと関わるが、職場でのパートタイマーの職業意識の高さというか、端的に言って生真面目なパートタイマーが描かれている。本当は納得して働いていないけれども、仕事だからきちんと取り組みやり遂げるという態度である。重要な点である。パート基幹化を目論む職場では、従来以上のパートタイマーの裁量の拡大を、パートタイマーに対する仕事の面白さややりがい

に結びつける傾向がある。そうしたささやかな自立性でパートタイマーを仕事に巻き込む。職業意識の高さは、こうした企業のパートタイマーに対する巻き込みを覆すほどのものかどうか、両者はまったく別物ととらえてよいかがはっきりしない。本書を通じてパート基幹化を強調して、それをパート意識から考えるならば、この点は丁寧に扱ってもらいたい。パートタイマーが巻き込まれない場合も、パート本人の職業意識の高さから基幹化に応じないわけでもないのか。

最後に、スーパーを研究してきた立場から疑問点を述べる。いろいろあるが3つだけ手短かに書く。①典型的な実業であり従業員がみな汗を流すスーパーの職場でなぜ意欲的にパートタイマーの学歴効果を問うのかよく理解できない。しかもやはり学歴効果などはないという。そういわれると逆に、最近の大卒パートが職場の当人たちの心情にどんな影響をもたらしているのかが気にかかる。既にスーパーでは学歴がパート採用時の1つのシグナルとなっている。②店長へ昇進するパートタイマーを観察し、正社員と同じ役割が期待されているという。日欧スーパーのキャリア形成を調べた評者の本を参考に、というけれども、評者はそうは思っていない。スーパーの店長や副店長は、いくつもの商品部門、特性の違うストアを次々に広く計画的に経験しながら育成される。地区長やバイヤーへの選抜を企図しているからである。だからこそ店長になるとなおさら日常的な残業を厭わず、少ない余暇時間を削ってまで他社のストア見学を入れたり、自宅で猛烈に勉強する。それらをパートタイマーに期待しているとは思えない。③パート二極化がみられるというが、著者は二極化の次の段階へ移行中であることを読み取る立場にいたはずである。企業単位でみれば、パート基幹化になじむ最低労働時間数の引き上

げ、もしくは、基幹化を若干抑制する形で人件費削減になじむ労働時間引き下げによる集団化などを目指しているものであり、むしろパート管理のしやすいいわば一極化の方向への動きが活発である。

著者が記すとおりパート労働には実に課題が多い。評者にとっては改めて女性の視点を強めてパートタイマーについて勉強する機会を得たことに敬意を払うとともに、率直にいて、読

後はここに書きとめた点を含めてさらに知りたいことが山積みとなった。その意味でパート労働に対する研究意欲を大いに啓発する書である。

(乙部由子著『中高年女性のライフサイクルとパートタイム―スーパーで働く女たち』ミネルヴァ書房、2006年11月刊、v+277頁、定価3200円+税)

(ほんだ・かずなり 国学院大学経済学部准教授)

●マルクス理論の現実資本主義に適用する方法論を探る
小幡道昭・青才高志・清水敦編 菊判二九四頁・三三三・五五円税込

マルクス理論研究

Ⅰ 価値と資本

- 1章 模倣ミイラと物象化……………清水弘志
- 2章 商品の使用価値と商品所有者の欲望……………清水弘志
- 3章 アダム・スミスにおける価値と富裕……………吉村信正
- 4章 マルクスにおける貨幣と価値……………吉村信正
- 5章 貨幣の本質とその能動性……………松尾水秀
- 6章 共同体と象徴貨幣……………西尾秀雄
- 7章 市場の内部化と知識経済化……………田中英明

Ⅱ 信用と恐慌

- 8章 最後の貸し手と中央銀行「ハジッコ」……………宮澤昭敏
- 9章 信用創造と株式市場の膨張……………小幡道昭
- 10章 好況末期の特殊な「資本過剰」と金兌換増大……………青才高志
- 11章 大恐慌型恐慌の理論……………村山泰治

Ⅲ 資本主義と社会主義

- 12章 ウィリアム・ピアの労働証券論……………結城剛志
- 13章 社会主義計算論の起源と拡充……………岡田和彦
- 14章 ロシアにおける資本主義の形成……………中村宗子
- 15章 非正規雇用の待遇改善を求める根拠について……………中馬祥子
- 16章 現代資本主義におけるインフレーション……………横川信子
- 17章 制度派マルクス経済学……………足立眞理子
- 18章 新たな経験的諸領域としての「人口」の問題……………足立眞理子
- 19章 新たな経験的諸領域としての「人口」の問題……………足立眞理子

●経済危機後の東アジアにおける社会経済システムの再構築
保住敏彦編著 AS判三〇〇頁・五〇四〇円税込

東アジア社会・経済制度の現状と課題

Ⅰ部 アジアの金融制度

- 1章 グローバリゼーションと東アジアの金融制度……………奥野博幸
- 2章 日本における金融セーフティネット……………竹内晴夫

Ⅱ部 アジア企業の競争戦略

- 1章 アジア企業の競争戦略……………李春王
- 2章 トヨタのレクサス・マーケティングと自動車流通の比較……………李春王

Ⅲ部 アジアのソーシャル・セーフティネット

- 1章 アジアにおける地域的ソーシャル・セーフティネットの形成……………佐藤元彦
- 2章 インドネシア危機とソーシャル・セーフティネット……………保住敏彦

●巨大小売企業の生成から現代まで百年にわたる発展過程の分析
中野安著 AS判三六〇頁・五七五円税込

アメリカ巨大食品小売業の発展

AS&Pを中心にアメリカ食品小売業の発展過程をいかに成立してきたか、現在のM&A下の再編期まで巨大小売企業の行動特徴を解明。

●平成一八年度中小企業研究奨励賞(本賞)受賞
福井幸男編著 関西学院大学産研叢書30 AS判一七二頁・四二〇〇円税込

新時代のコミュニティ・ビジネス

御茶の水書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03-5684-0751
ホームページhttp://www.ochanomizushobo.co.jp/